

第27回院内学術研究発表会

平成27年 1 月29・30日

1. 当院におけるロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術の初期治療成績

泌尿器科

坂本茉莉子 原 琢人
近藤 有 松原 重治
小川 隆義

【目的】

当院では2014年7月より da Vinci Si システムを用いたロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術(RALP)を開始した。初期治療成績を検討する。

【対象と方法】

2013年7月から2014年10月までにRALPを施行した58例を対象とした。年齢は52～75歳(中央値65歳)、術前PSA値は3.3～28.1(中央値6.5)、グリソンスコアは6が21例、7が21例、8以上が16例、術前の臨床病期はT1c 12例、T2a 30例、T2b 5例、T2c 8例、T3a 3例であった。

【結果】

全例でRALPを完遂でき、手術時間は155～552分(中央値258分)、コンソール時間は115～499分(中央値208分)、出血量は10～1620cc(中央値100cc)で輸血を必要とした症例はなかった。神経温存は14例で行われ、両側2例、片側12例であった。切除断端陽性率は58例中18例(31%)、stage別ではpT2 11例(22.9%)、pT3 7例(70%)であった。尿禁制率(パッド≤1枚/日)は術後1、3、6ヶ月で33%、69%、82%であった。

【考察】

導入初期よりRALPは大きな合併症なく比較的安全に施行し得たが、初期症例の為、切除断

端陽性が諸家の報告よりもやや多く見られた。断端陽性部位や関連因子についても検討を行う。

2. 看護基礎教育の充実に向けた取り組み

～専任教員養成講習会 看護教育実習の実際～
看護専門学校

中林 朝香 中島 啓子
藤田美佐子 井上 恵実
藤元由起子 名村かよみ
谷口 真紀 藤後 栄一
内海 尚美 神戸真由美
松井 里美 山田 道代
柳 めぐみ

看護専門学校においては、臨床経験が5年以上あり、専任教員養成講習会を受講した者などが専任教員となり、看護基礎教育に携わっている。教員の質の向上が看護基礎教育の充実につながるため、専任教員養成講習会では8ヶ月間(34単位/885時間)の講習を実施している。その中の看護教育実習(2単位/90時間)は、学ばせたい内容を、どのような方法で、どう伝えれば、学生の思考を揺さぶり、知識の定着に結びつく教育になるのかを経験から学べる重要な科目である。

姫路赤十字看護専門学校では、今年度5名の講習生を受け入れた。講習生は、看護学生と関わりながら授業案や実習指導案を練り、講義や臨床実習指導に臨んだ。そして、レディネスを把握する事の必要性や学生の思考を引き出す事の難しさを感じていた。また、受け入れた学校側も、各教員が教育観・看護観をみつめるよい

機会となったため、看護教育実習の実際について報告する。

3. 学生奉仕団活動を通しての学び

姫路赤十字看護専門学校 2 年

佐々木 葵 西久保 忍

西中ほたる 山崎 香依

赤十字奉仕団は、赤十字事業を支え、地域の人道的なニーズに応えていくことを目的として、第二次世界大戦後に創設された。

本校の学生は、入学時から全員が看護学生奉仕団に所属し、院内図書班、献血班、小児病棟訪問班、施設訪問班、保健所主催のエイズキャンペーンや支部主催のボランティアなどで活動している。

奉仕団員には、赤十字の一員として、意思と行動、自発性と主体性、意識を持ち行動することが求められている。

入学当初、奉仕団活動に参加することが奉仕だと考えていたが、様々な人と関わっていくうちに、奉仕に対する考えが少しずつ変化した。大きなきっかけとなったのは、今年度参加した本社研修である。他の赤十字看護学生との意見交換をととして、奉仕とは奉仕活動に参加することだけでなく、普段から困っている人を助けたいと自ら行動することであると学んだ。

そこで、奉仕団活動での学びと今後の課題について報告する。

4. がん化学療法における看護師の業務拡大に関する取り組みと報告

看護部 師長会

井上 豊子 芦田真知子

今川真理子 芝山 富子

下田 明美 田内千恵子

八瀬和佳恵 横田裕美子

若松 良子 三木 幸代

2008 年より、病棟での化学療法看護の中心的な役割を担うことを目標に看護静脈注射レベルⅢ（がん化学療法）院内認定制度を設けて、講

義と外来化学療法室の実習研修を実施し、看護師を育成してきた。その業務には、医師の業務負担軽減を考え「抗がん剤 2 剤目以降の投与」がある。しかし、認定者が増えないことが有り、看護師の抗がん剤 2 剤目以降の投与は、担えていなかった。

そこで、抗がん剤の取り扱いが多い内科病棟の看護師を対象に、2014 年 3 月看護師静脈注射レベルⅡ取得者に対して、抗がん剤に関する追加研修を行い終了した者は抗がん剤 2 剤目以降の投与業務が出来るように変更した。

結果、内科 1 病棟を調査すると、2013 年 6 月は看護師による抗がん剤 2 剤目以降の投与は全体の 25% であったが、2014 年 7 月は 86.7% を担うようになっている。

がん化学療法における看護師の業務拡大への取り組みと成果、課題について報告する。

5. 入退院センター導入に向けての取り組み

地域医療連携室

志水 真弓 柴田 恭代

藤本 麻衣 鈴木 孝子

前田 智成 田口かよ子

奥新 浩晃

看護部師長会

中村 孝子 永井 康恵

太田 加代 竹重 郁江

田中久美子 濱田 和代

三木 幸代

PFM（patient flow management）は、東海大学医学部付属病院の経営改善の過程の中で生まれたシステムであり、患者の外来受診の段階から入院、そして退院後まで一貫して支援するマネジメント方法である。今、急性期医療を充実するために 7：1 看護体制をとる病院の多くが、この PFM の導入を急いでいる。

当院も早期より PFM 導入の検討がなされていたが、平成 26 年 4 月、更なる地域連携強化目的として地域医療連携室が立ち上がったことを機に、PFM（当院では入退院センター）実現に

向けて動き出すこととなった。

検討メンバーと師長会、看護部在宅療養支援委員会らと共同しながら準備を進めている。

当院の入退院センターの目指す機能と効果など、その進捗状況を報告する。

6. 当院の人工心肺システムと安全対策について

臨床工学技術課

中村 憲明	山中 大幸
山本 雅寛	田渕 晃成
堀田 雄介	後藤 唯姫
深井 秀幸	三井 友成
松岡 孝志	

心臓血管外科

毛利 亮

人工心肺装置は、心臓外科における手術などの際、一時的に心臓と肺の機能を代行する医療機器である。当院でも、2014年4月から心臓外科手術が始まり、心停止下におこなわれる心臓・大血管手術20例に人工心肺装置が使用されている。現在、臨床工学技士2名で人工心肺操作に従事している。

心臓外科手術において、人工心肺装置を用いた体外循環は重要な技術の一つであり、患者生命に直接影響することから、高い安全性や信頼性が要求される。

当院では、日本体外循環医学会勧告「人工心肺における安全装置設置基準（第4版）」に基づき各種安全装置を設置しており、ソフトウェアの面からも各種安全策を講じている。今回、当院の人工心肺システムの紹介と安全対策について報告する。

7. 病棟薬剤業務についての現状分析

薬剤部

永井美由紀	谷水久美子
樋本 真紀	山口 くき
岡田 百代	佐古亜佑美
福山 正人	大里 勇二
山根 裕之	松下 幸司

谷川真由美	上野 聖子
宮崎 昌則	喜多 良昭
上坂 好一	

当院では全病棟に薬剤師を配置し、チーム医療の推進を目的として、病棟業務を行っている。病棟での薬剤業務は投薬後の業務である「薬剤管理指導」と投薬前の業務である「病棟薬剤業務」に分けられ、病棟薬剤業務実施加算に必要とされる業務は病棟配置薬・麻薬の管理、抗がん剤等の無菌調製、持参薬の鑑別、処方薬の配薬セットなど多岐にわたっている。今回、病棟業務日誌をもとに病棟薬剤師の具体的な業務内容や業務時間を調査した。また、平成26年10月1日から11月30日まで2か月間において、薬剤師による疑義照会や処方提案、他職種からの相談応需の件数・内容を分析し、現状を評価するとともに、改めて病棟薬剤業務の見直しや今後の展望について検討したので報告する。

8. アスペルギルス症に合併した鼻性視神経症の1例

耳鼻咽喉科

松山 祐子	橘 智靖
小河原悠哉	清水 藍子

眼科

清水 敏成 塚本 真啓

症例：82歳、男性。既往歴：糖尿病、陳旧性脳梗塞、高血圧。現病歴：当科受診3日前、左側頭部から左眼の奥にかけて激しい疼痛を自覚した。当科受診2日前より左視力の低下も自覚し、当院眼科を受診したところ、鼻性視神経症の可能性を指摘され当科を受診した。左鼻腔内に明らかな異常所見は認めなかった。CTでは左篩骨洞から蝶形骨洞にかけて軟部陰影を認め、これに接する眼窩内側壁の一部は骨が菲薄化していた。鼻性視神経症として保存的治療を開始したが、疼痛の改善が得られなかった。入院7日目に内視鏡下鼻内副鼻腔手術を施行した。左後部篩骨洞には真菌塊と思われる沈着物

が存在し、その後方は眼窩壁に沿って浮腫状の粘膜肥厚を呈していた。篩骨洞・蝶形骨洞の開窓を行い、沈着物及び病的粘膜を可及的に除去した。病理組織結果はAspergillosisであった。術直後より抗真菌薬の投与を行った。視機能に明らかな改善は得られなかったが、側頭部痛から左眼の奥にかけての疼痛は徐々に改善した。術後1年経過するが、副鼻腔炎の再燃はなく、外来にて経過観察中である。

9. 新乳房撮影室紹介～トモシンセシスの有用性～ 放射線技術部

佐々木 彩 萩原 紗弓
福田 和子 中島 敏博

平成26年4月、最新のFPD式乳房撮影装置の導入とともに、乳房撮影室を移設した。移設に伴い、安心かつ安全な検査を行える環境を整えた。マンモグラフィ検査は緊張と苦痛を伴う検査のため、内装にもこだわり、リラックスできる検査室づくりを目指した。また、操作室を撮影室内に設置することで他のX線撮影室と区画化し、女性技師と患者の1対1で検査でき、安心感を与えられる空間となった。以前と比べて、マンモグラフィ検査およびステレオガイド下生検を行うのにも最適な環境となった新しい乳房撮影室を紹介する。

また、新装置は従来の2Dマンモグラフィに加え、トモシンセシス撮影により3Dマンモグラフィの撮影が可能である。トモシンセシス撮影は、組織の重なりを除き乳腺内に隠れた病変の観察が可能であり、病変の見落としの危険が減少する。当院では、精査領域においてトモシンセシス撮影を施行しており、有用性が見られたので合わせて報告する。

10. 小児副脾捻転の一例

放射線科

小柳 由季

症例は2歳11か月男児。5日前からの腹痛に続き発熱が出現し、近医で内服を行うも改善せ

ず、炎症反応高値と左上腹部腫瘤を指摘され精査目的に紹介入院となった。CTで左上腹部に造影効果のみられない脾臓様臓器を認め脾臓の梗塞が疑われた。また、その尾側にほぼ同等の大きさで脾動静脈と連続性のある脾臓と考えられる臓器を認めた。梗塞になった脾臓は連続するwhirloop signを認め脾捻転と診断、腹腔鏡下に摘出術が施行された。間膜を欠いた脾臓は540度捻転し、脾捻転は遊走した副脾であった。尾側の脾臓には脾結腸間膜を認めたため本来の脾臓と診断された。小児における正常脾と同程度の大きな副脾捻転の一例を経験した。

11. 低補体血症を伴ったANCA関連血管炎の2例 内科

大山 麻美 竹本 玲加
山中龍太郎 廣政 敏
香川 英俊 上坂 好一

要旨：

症例1：76歳、男性。間質性肺炎の既往あり。2014年4月全身に紫斑が出現し、Cr値上昇、血尿、蛋白尿を認めたため当科受診。症状とMPO-ANCA陽性より顕微鏡的多発血管炎と診断したが、低補体血症は非典型的であるため、腎生検を施行。半月体形成などの糸球体病変は認めなかったが、間質病変は血管炎に矛盾しない所見であった。

症例2：74歳、女性。2013年夏頃より末梢神経障害あり、同年冬には大腿部、腰部などに疼痛が出現。2014年1月より微熱、食欲低下が持続し他院入院し精査したが熱源は指摘できず。抗生剤治療に反応せず、RF高値、低補体血症を認めたため当科受診。症状とPR3-ANCA陽性よりANCA関連血管炎を最も疑ったが、低補体血症も伴っており、診断確定のため腎生検を施行。血管炎として矛盾しない病理像であった。

【考察】 低補体血症を伴うANCA関連血管炎は意外に多い可能性があるが、クリオグロブリン血症、IgG4関連疾患、SLEなどとの鑑別目的で、組織

学的評価をすべきである。

12. スガマデクス投与直後にロクロニウムアナフィラキシーショックを発症した帝王切開の1症例

麻酔科

出口 美希	大森 睦子
倉迫 敏明	八井田 豊
石川 慎一	仙田 正博
山岡 正和	稲井舞夕子
古島 夏奈	上川 竜生
吹田 晃享	村上 幸一

要旨

36歳妊娠37週5日初産婦。

低置胎盤のため全身麻酔下の帝王切開が予定され、チオペンタールとロクロニウムで迅速導入、児娩出までセボフルランと亜酸化窒素、娩出後プロポフォールとレミフェンタニルで麻酔を維持し、フェンタニル投与を追加した。ロクロニウム追加投与は必要なかった。

手術後に麻酔薬を全て中止し、スガマデクスを投与、3分後に覚醒、自発呼吸、筋弛緩回復を確認し抜管した。直後から意識障害、血圧低下、頻脈、酸素飽和度低下、体幹発赤をきたしアナフィラキシーショックを疑った。再挿管、エピネフリン投与、大量輸液により状態は改善した。経過からスガマデクスを原因薬剤と疑ったが、後日スガマデクスの皮内試験は陰性であった。他の被疑薬であるロクロニウムの皮内試験で、投与2分後から気分不良、四肢眼瞼発赤腫脹、呼吸困難、頻脈、血圧低下が出現し、エピネフリン投与を必要とした。

以上から原因薬物はロクロニウムであると診断した。

13. 超音波検査の有用性を認識した経験症例 形成外科

原田 崇史	最所 裕司
前場 崇宏	菅野 百加

超音波検査は簡便で低侵襲な補助診断法の一

つである。

異物の診断感度が高く深度や解剖学的な位置関係などの情報を得られるため異物除去の際には術中ガイドとして有用である。

また鼻骨骨折整復の際には、リアルタイムに整復状況を確認できるため変形の残存が確認できれば、その場で再整復することができ客観的評価も可能である。

今回我々は超音波検査を用いた異物除去症例、鼻骨骨折症例を経験した。

代表症例を供覧しその有用性について報告する。

14. 脳・心臓血管センターの活動状況について 循環器内科

藤尾 栄起	向原 直木
平見 良一	内藤洋一郎
増田 拓郎	

姫路赤十字病院は、これまで地域中核病院としての「がん診療連携拠点病院」、「周産期母子医療センター」として重要な機能を果たして参りましたが、本年4月21日より3本目の柱として脳・心臓血管センターを開設することとなりました。この地域の動脈硬化性疾患救急診療に対応すべく循環器内科医、脳神経血管外科医で24時間365日をカバーするようにしています。まだまだ不備な点もありますが、開設半年を過ぎ、皆様の御理解・御協力のおかげをもちましてようやく軌道に乗りつつあります。この度、当センターの活動状況について症例を交えて報告させていただきます。

15. 当科における臍部Ω型小切開による新生児開腹手術の経験

小児外科

宮内 玄德	中谷 太一
畠山 理	

■抄録：

当科では肥厚性幽門狭窄症に対して施行していた臍部Ω型小切開による開腹手術（以下同法）を近年、腹膜炎のない新生児先天性消化器

疾患に対しても施行している。

2011年7月に57生日の腸回転異常症に同法を導入して以降、2014年10月までに12例の手術を経験した。疾患は腸回転異常6例、十二指腸閉鎖4例、小腸閉鎖1例、小腸腫瘍1例であり、全例同法で完遂しえた。

同法でも視野は十分得られ、整容性にも優れており、有用な方法と考えられたので報告する。

16. 難治性先天性乳糜腹水の1例

小児科

向井 祥代	江渕 有紀
百々 菜月	中川満理子
稲熊 洋祐	松本 真明
梶原 佑子	宮内 寛子
多田 慎吾	堀之内智子
藤原 安曇	井上恵理子
上村 裕保	高見 勇一
柄川 剛	高橋 宏暢
濱平 陽史	五百蔵智明
久呉 真章	

小児外科

宮内 玄德	中谷 太一
畠山 理	

【はじめに】

先天性乳糜腹水は稀な疾患であり、その重症度は一時的な絶食で軽快する例から複数回の外科的治療を要する例まで様々である。

【症例】

在胎35週、出生体重3656gの男児。妊娠26週時から胎児腹水を指摘されていた。出生時の腹部膨満は著明。諸検査より乳糜腹水と診断し、絶食、オクトレオチド、プレドニゾロンで治療を開始したが、その効果は一時的で、MCTミルクを開始すると腹水貯留は悪化し、絶食と高カロリー輸液での管理が長期化した。経過中に胆汁うっ滞型肝障害を発症したため内科的治療の限界と考え、外科的治療に移行した。日齢108に腹腔鏡下リンパ漏結紮術を施行したが効果は得られず。日齢129、インドシアニングリー

ン（ICG）リンパ管造影下の開腹術ではリンパ漏出部位を同定でき、同部位をシーリングした。術後、腹水は消失した。

【まとめ】

開腹リンパ漏結紮術においてICGリンパ管造影は非常に有用であった。

17. 頸部郭清術のクリニカルパス導入後のリハビリテーションについて

リハビリテーション科

大道 克己	皮居 達彦
藤本 智久	大島 良太
井上 紗希	堀川 晃義
浜根 弥恵	岡 智子
井上 貴博	六山 梓
行山 頌人	岡田 祥弥
森本 洋史	西村 暁子
中島 正博	西野 陽子
橋本しおり	中野 朋子
田中 正道	

頭頸部がんの頸部リンパ節転移に対しては、リンパ節郭清術が行われるが、副作用として、副神経障害による肩関節の機能障害を生じる。がんのリハビリテーションガイドラインでは、その障害の改善が図れるとして、リハビリを行うことを推奨している。

当科では、歯科口腔外科、耳鼻咽喉科、5階西病棟と連携し、2013年度より、頸部リンパ節郭清術のクリニカルパスにリハビリを組み入れ、運用を開始している。

クリニカルパスの導入により、早期よりリハビリ介入が可能となり、治療成績も安定したものとなっている。そこで今回、頸部節郭清術のクリニカルパス導入後のリハビリについて、若干の考察を加え報告する。

18. 骨肉腫切除後の再建術

整形外科

佐藤 世羅	青木 康彰
三好 祐史	大西 厚範

村田 洋一 池上 大督
松岡 孝志 阪上 彰彦
田中 正道

骨肉腫は骨原発性悪性腫瘍の中では最も頻度が高く、腫瘍細胞が骨（類骨）を形成することが特徴である。かつては手術療法として切断術が主に行われていたが、化学療法と手術を組み合わせた集学的治療の導入により、今日では患肢温存が主流となっている。現在の手術療法では、腫瘍広範切除により生じた骨欠損に対して、人工関節や血管柄付き自家骨移植、自家処理骨移植などで再建を行う。それぞれの再建術の適応に関しては、年齢、腫瘍のサイズ・部位などを考慮して決定する。当院で行っている再建術は人工関節と凍結処理骨移植であり、自験例を交えながら骨肉腫切除後の再建に関して報告する。

19. 心臓血管外科手術開始後約半年の経過報告

心臓血管外科

毛利 亮 田井 龍太

平成26年4月より心臓血管外科手術を開始して11月末までに30例の手術を行った。内訳はJACVSD登録症例（いわゆる心臓胸部大血管手術）22例、腹部大動脈および末梢動脈手術5例、その他末梢血管手術3例である。全例待機手術であり、下肢静脈瘤2例をのぞき28例は当院循環器内科からの紹介であった。院内死亡なく、再手術を要した合併症は出血1例、心タンポナーデ1例であった。これら症例の手術成績の検討および、緊急対応、大動脈ステントグラフト治療、新専門医制度への対応など、今後、心臓血管外科運営してゆくための課題について考察する。

20. 脳・心臓血管センター開設後の当科での診療状況の報告

脳神経外科 脳・心臓血管センター
高橋 和也 清水 洋治

抄録

2014年4月21日に脳・心臓血管センターが開設され、約8カ月が経過した。超急性期に経静脈的血栓溶解療法（t-PA静注療法）を施行した患者数だけに限っても、2012年が3例、2013年が6例であったのに対し、2014年は12例（2014年11月30日時点）と著増している。今回は開設後8カ月を経過した時点での脳血管障害症例の動向について報告する。また、現時点での課題、今後の展望についても考察する。

21. 口腔外科手術における部位間違い事故への対応

－多職種での確認、歯科衛生士の立場から－
歯科口腔外科

片岡 聡子 谷澤由紀子
北村 里織 谷 泰子
後藤 優子 矢村 恭子
福村 元洋 花田 泰明
小川 雄右 釜本 宗史
藤原 成祥

姫路赤十字病院口腔外科では、入院、外来を合わせると年間4000件を超える抜歯や抜歯に準ずる口腔内手術が行われている。極めて過密なスケジュールで行われており、手術に際する患者誤認や部位誤認の可能性が危惧され、従来から対策を行ってきた。しかしながら最近1年間に3例の部位誤認が発生しており、その都度分析を行い対応してきた。医療安全委員会、事故調査委員会などからも意見をいただき、術前の確認方法のマニュアルを作成してきた。この度の3例のうち1例は手術室での手術であったが、残りの2例は外来手術であった。手術室手術では術者も一人ではないことが多く、看護師など多人数、多職種での確認が可能であり、事故を未然に防げる可能性が高いと考えられる。一方外来手術では1人の術者と1人の介助者と少人数で行われる機会が大半であり、思い込みによる事故が発生しやすい状況であるといえる。そこで介助者である歯科衛生士から積極的にアプローチすることにより、誤認の防止をす

ることを目指している。この度口腔外科の取り組みを紹介し、皆様からのご指摘、ご意見をいただければと考えている。

22. 当院における胎児超音波スクリーニングの現状と課題点

姫路赤十字病院 検査技術部 生体検査課

松崎 俊樹	簗田 直樹
高原 美樹	小倉慎太郎
住ノ江功夫	林 愛子
貝阿彌裕香子	上山 昌代
石塚ゆかり	河谷 浩
辻井 一行	玉置万智子
綿貫 裕	

出生前診断や周産期管理において超音波検査による胎児スクリーニングの意義は高い。そこで、当院における胎児スクリーニングの超音波所見と生後に新生児から得られた所見を比較し課題点を検討した。対象は2010年1月～2011年12月までに胎児スクリーニングを施行した母体952例。その後、経過をフォローし得た新生児998例。

結果としては心臓・四肢・脳で感度または正診率が低かった。心臓ではいずれも描出不良により指摘されていない疾患があった。対策として装置のプリセットを変更し、描出不良例を少なくした。脳は正確な断面による計測値で判断することを徹底した。四肢に関しては合指症や多指症はスクリーニングでの検出は困難であったと考えた。今回の検討により、胎児スクリーニングで得られた所見の意義を理解し、その上で臨床側に報告することが重要であると考えられた。今後、この検討を基に更なる精度の向上を目指したい。

23. 傍大動脈リンパ節腫大を契機に診断された卵管癌の1例

産婦人科

依田 尚之	小高 晃嗣
清時 毅典	西田 友美

佐藤麻夕子	松本 典子
中山 朋子	中務日出輝
水谷 靖司	

卵管癌は腫瘍を形成せずにCA125が高値となる場合が多く術前診断が困難である。CA125高値と傍大動脈リンパ節腫大を契機として手術により卵管癌と診断された1例を経験したため報告する。

症例は47歳。2経妊2経産。機能性子宮出血に対して低用量ピル内服で加療中であった。多量の性器出血を主訴に他院受診し、CA125 130U/mlと高値であった。明らかな骨盤内病変を認めないが、246U/mlまで上昇したため全身精査し、CTで傍大動脈リンパ節腫大を認めた。CTガイド下生検で卵管原発癌が疑われ、両側付属器切除術、腹式子宮全摘術、大網部分切除術、骨盤及び傍大動脈リンパ節郭清術が行われた。術後診断は左卵管癌で、原発腫瘍径は7mmであった。現在、術後補助化学療法中である。

骨盤内に明らかな異常を認めなくとも、CA125が異常高値の場合は、卵管癌を疑い転移を含めて全身精査を十分に行う必要がある。

24. 食道扁平上皮癌と胃腺癌の多重癌症例の検討

病理診断科

河田 卓也	堀田真智子
内野かおり	和仁 洋治

要旨

【背景】

食道癌手術では胃管を用いた再建が一般的で胃癌の併発は問題となる。

【目的】

原発性食道扁平上皮癌（Esq）と原発性胃腺癌（Gad）の関連を検討した。

【方法】

2004年から2013年の間に、当院で内視鏡的粘膜切除術（EMR）、粘膜下層剥離術（ESD）および手術により治療されたEsq134例のうち、

同時または異時性にGadを併発した多重癌症例の割合、年齢、男女比、発症部位、組織型、進行度を検討した。

【結果】

EsqとGadを合併した症例は11/134例（8.2%）で、そのうち同時発症例は7例であった。男女比は10:1、Esq発見時は平均64.7歳であった。Esqのうち6例は胸部下部食道、Gadのうち4例は胃上部に発症していた。Gadのうち高分化腺癌のみの症例が6例、早期癌は9例であった。

【結論】

EsqとGadの合併する症例では早期胃癌の割合が高く、術前の内視鏡検査では詳細な観察が必要である。

25. 緊急脾摘術を要した、脾悪性リンパ腫による胃穿破、出血性ショックの1例

外科

桂 佑貴	大塚 翔子
小来田佑哉	梶原 義典
田井 龍太	西脇 紀之
岡本 拓也	浜野 郁美
芳野 圭介	戸田 桂介
下島 礼子	湯浅 壮司
信久 徹治	遠藤 芳克
渡邊 貴紀	松本 祐介
渡辺 直樹	甲斐 恭平
佐藤 四三	

【緒言】 脾原発悪性リンパ腫の胃浸潤、穿破による出血性ショックという病態は非常に稀であり、医学中央雑誌で検索する限り報告例は認めていない。今回、同病態に対し、緊急手術を行い、救命し得た1例を経験したので報告する。

【症例】 71歳 女性 左側腹部痛を主訴に紹介医受診し、腹部エコー、上部消化管内視鏡検査にて脾腫瘍、胃壁浸潤を疑われた。当院へ精査加療目的に紹介となり精査予定であったが、検査前日に吐血を主訴に救急搬送され、CTにて脾腫瘍の胃

穿破を認め、出血源と診断した。搬送後、出血性ショックとなり、緊急で脾摘、胃部分切除を施行した。病理結果は脾臓悪性リンパ腫（Diffuse large B-cell lymphoma）であり、異型細胞の胃壁への浸潤を認めた。術後化学療法を施行し、現在術後1年無再発生存中である。

【考察】 本症例はsevereなショック状態であり、時間的猶予が少なく、緊急手術となった。術中所見では腫瘍は胃以外にも横隔膜や脾尾部へ浸潤を疑う所見を認めたが、腫瘍よりの出血の程度が強く、また術前に悪性リンパ腫を疑っていたため、腫瘍を一部残しながらも、脾摘を急いだ。oncologic emergencyでは癌腫や予後などの因子を考慮しつつ、迅速な判断が求められるが、救急処置が成功すれば、後治療を行うことが可能である。今回は術後化学療法を施行できる状態まで回復し、現在のところ良好な予後を得ている。

【結語】 胃穿破を来し、出血性ショックに陥った、脾悪性リンパ腫の1例を経験した。

26. 術前経口補水療法の導入へのとりくみ

看護部 6東病棟

上田梨恵子	中塚 恵理
橋本 真香	新井裕美恵
神名川佳子	幸内 智子
三木 柚紀	坂北 阿紀
楨得 照子	馬舩 一恵
田内千恵子	

ERAS：Enhanced recovery after surgeryとは、“術後回復力の強化”と訳され、術前の絶飲食がないこと、術後の硬膜外鎮痛、術後早期経口摂取、カテーテル類の早期抜去など複数の主要要素で構成される。中でも、術前経口補水はERASの一部として、患者の絶飲食の苦痛の緩和や術後の回復への有用性が報告され注目を集め、多くの施設で導入されつつある。

6 東病棟でも2014年4月からパイロット的に
麻酔科・外科の両診療科の了解が得られた症例
に術前の経口補水療法の適応を開始した。

手術室に9時到着の手術で、かつ両科の指示
があった症例を対象とし、12月1日時点で腹腔
鏡下胆のう摘出術3例・ヘルニア根治術2例・
ラジオ波焼灼術1例・腹腔鏡下幽門側胃切除術
1例・腹腔鏡下結腸切除術2例・ストマ閉鎖術
1例・肝臓切除術1例の11例に実施できた。
現時点での状況と対象症例を拡大していくため
の課題について報告したい。

法につながった。

27. 気管切開チューブの脱落事例からの事故防 止対策―術前カンファレンスの効果―

医療安全推進室

守山 聡美	坂本佳代子
大前 宏之	馬舩 一恵
黒田 尚美	福島五穂美
山本 繁秀	喜多 良昭
五百蔵智明	最所 裕司
上坂 好一	

気管切開チューブの抜去は呼吸状態に直結し
た危機的な状態をもたらすため、予防的対応と
発生後の迅速な対応が求められる。今回、気管
切開術後2日目に体位変換を実施した後、呼吸
状態が低下し、気管切開チューブの皮下への脱
落が疑われた。今回の事例の振り返りより、術
前カンファレンスを導入し、患者にとって効果
的な気管切開術となるよう治療ケア体制の標準
化を図ることを目的に取り組んだ。

術前カンファレンスを実施することで、術前
の確認事項として 対象、検討内容（気管切開
の必要性、カニューレの種類、全身状態、胸部
画像、予後、抜管の見込み、術後の看護体制、
術後評価の実施）を決めて、患者や家族を含め
て、職種間で予防策を作成することで、急性期
合併症への備えとなった。術前カンファレンス
によりお互いの役割が明確になり、患者の治療
やケアについての相談がしやすくなり、術後の
評価も意識的に行い、治療の質が担保できる方